

- 1 佐保姫に紅ひく神の手の大き
- 2 雪解水に溶けあるくれなゐを思へ
- 3 春暁は大河にのりて来たりけり
- 4 日の沈む音の聞こゆる梅見かな
- 5 雛納むうすくれなゐをまとはせて
- 6 白蓮の揺れてこの世の如きかな
- 7 風船が雨に叩かれつつ昇る
- 8 小面をつければとはの花ざかり
- 9 あをぞらを穿ち日はありつくづくし
- 10 稀覯本書架可動式卒業す
- 11 眠たげに木の横たはる春のくれ
- 12 鬼の棲むてふ村にして花菜村
- 13 盛りみて空き家の如き桜かな
- 14 地をあふれ湖を散り敷く桜かな
- 15 浮く花の光るともなく手水鉢
- 16 涸井戸に水道隣る花の下
- 17 帆畳めば船あやふさの春の闇
- 18 晩春の野の扉には蝶番
- 19 梨の花夜の明るさが日本間に
- 20 日時計に歯車なけれくろあげは
- 21 愛染の闇にほうたる吸はれけり
- 22 初夏の煙の中に伽藍かな
- 23 笑ひをへ夏服の立ちあがりけり
- 24 月涼し木彫の熊に木の睫毛
- 25 朝涼の材木は刃に脱がされつ
- 26 河骨や岸蹴りて舟進みそむ
- 27 梅の実や空だしぬけに朝の色
- 28 宵越の大き雨滴が紫陽花に
- 29 あぢさゐの朽ちてそのまま人に会ふ
- 30 蟬の穴半ばつながりかけてをり
- 31 その人のみなくなる日の竹煮草
- 32 老鶯の思ふが儘に吾動く
- 33 蛭袋ひらけば言葉ばかりかな
- 34 蝶の空鏡の中は古りやすき
- 35 あぢさゐの朽葉裏より錦鯉
- 36 色無きも混じるあふひを暗く見る
- 37 手が触れてゆきことごとく片影に
- 38 灯心蜻蛉空へむらさき流れ込む
- 39 蓮の花咲く境内に木端あり
- 40 くちなはへ付着の白は花菖蒲
- 41 帚木のたふるる音のふいにせし
- 42 あやとりに橋現るる夕立かな
- 43 危ふしと言へど日傘を振り歩く
- 44 寝がへりに胃の水動く晩夏かな
- 45 泡付けて鯉衰へる涼しさよ
- 46 夕顔の話をすれば大雨に
- 47 小雨続きの空豆を煮こぼせる
- 48 遠山は薄墨に秋立ちにけり
- 49 貼り付きて地蔵の色の飛蝗かな
- 50 紫陽花の朽ちしに飛蝗ひつかかる

- 51 堂の秋閻魔の鼻の奥まで朱
52 つくばひにほほづきの葉がどつぷりと
53 天心に白き月置く捨扇
54 擦りへりて月光とどく虫の庭
55 月は鋭く日はなまくらぞ真葛原
56 草雲雀時計の宿す時の嵩
57 書に暮れて移ろふものに天の川
58 文の上の夕餉の皿や鶏頭花
59 秋水と墨の交はる唐硯
60 万の鋌沈みゐるらむ秋の海
61 秋晴に擦る墨何色とも見ゆる
62 水中に轍ありけりいなびかり
63 天の川星踏み鳴らしつつ渡る
64 目を瞑るやうに雨止む草紅葉
65 漆紅葉昼の花火を見つむるな
66 朝空の高きを燕帰るなり
67 りんだうのあをの響ける壺中かな
68 潰えては肉に浮かびぬ柿の蒂
69 離ることなし流灯と映る灯と
70 鶏頭花手話に独言なかりける
71 どの戸にも日のある秋と思ひけり
72 一目見ていさよひの夜は明るかり
73 隠元や墨絵の月は無造作に
74 索引のむかしことばの爽やかに
75 桃剥くや葉書の隅にとほき船
- 76 結界に入りて秋雨の明るしよ
77 涙しだいに口へ流れて秋をはる
78 能面の木箱へかへる時雨かな
79 寒林の鳥を放つは眩しけれ
80 冬晴を突き出でゐるは箒の柄
81 さまざまの色よぎりける焚火かな
82 葛飾に来て外套の金釦
83 恋をはる葱汁を小鍋にうつす
84 ゆふぐれやねばつくほどに冬日濃し
85 金堂の揺れどほしなる寒の水
86 小春てふ平たきものを歩みけり
87 冬川にどれほど夜の溶けるんか
88 初雪の明るき木戸を開け放つ
89 しづかなり冬暁を待つ人も
90 文殻を焚けば浅草見ゆるなり
91 日本間の匂ひのしたる冬の雲
92 もう一度言ふ蕪提げ逢ひに来よ
93 にはとりの首見えてゐる障子かな
94 逢引に蕪を提げて歩きけり
95 初空や水とはうしなはれやすき
96 掌の熱の豆腐にうつる寒の雨
97 声のある家をのぞけば枯芙蓉
98 如月や日は振じ切れて海のうへ
99 木像のまとふ黄金や冴え返る
100 洛外へ煙うつろふ菜漬かな